

建築と日常

偶然足を踏み入れた小学校で懐かしい思い出に浸るの巻

長島明夫

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ来て
妻としたしむ

石川啄木『一握の砂』1910年

1.

携帯電話にはあまり興味がなくて、ずっと前に加入した時の料金コースのまま何年もほったらかしにしていたら、当時は確かに割安だったはずが、いつしかそのコースは他より割高になっていた。変化しないこと、動かないことで勝手に損がかさんでいくようなシステムにはなるべく与してたくない。このところよく預金通帳を確認する。

大学を出てから5年半ほど勤めていた出版社を去年の11月に辞めた。それなりに能動的に辞意を表明したつもりにもかかわらず、たまたま時期が例の世界不況と重なってしまい、マスコミはハケンギリだのナイトトリケシだの騒がしくて、だんだんとこちらまで気分が落ち込んでくるのだった。大学の建築学科で共に学んだ友人たちも、ちょうど30を過ぎてそれぞれの設計事務所から独立する頃合いだとはいえ、将来への不安をもっともらしく口にする彼らと話をしても素直に悩みを吐露しあう気にはなれず、ふん、どうせ設計の仕事なんて人類が続く限りいくらでもあるだろうと心の中です

ぶやいてみせる。出版関係者にはまったく受難の季節である——旧友への思いやりにまるで欠けたこの態度にも、出版不況をことさら叫ぶジャーナリズムの影響を見ることができのかもしれない。

ともかく、個人で設計事務所を運営していこうとする友人たちの未来が必ずしも明るくないのは事実によ、他方、スーパーゼネコンや大手広告代理店、外資系コンサルなどに職を求めた学友らとは顔を合わせるのも心労で、やれ年収が大台に乗ったとか、ドイツ製の高級車を中古ながら手に入れたとか、ただそういう類の噂話が耳に届いてくるばかりである。学生時代は横一線、いや確かにこちらのほうが優秀と言われたはずなのに、この現状の差はなんたることか。100年に一度の経済危機というけれど、100年前の啄木もいまの僕と同じ気持ちだったろうか。200年前、300年前の人はどうだろう。

2.

仕事の相談で四谷のオフィスにK氏を訪ねた。昼時だったので、どこかで食事でも取りながらということになり、建物の外へ出た。申し訳ないけどちょっと寄るところがあって、というK氏が先を歩いていく。ほどなく着いたのは、近所の小学校だった。といっても数年前の統廃合によって閉校に



なった校舎で、現在は区の関連団体の管理のもと、使われなくなった教室や体育館を一般に貸し出しているらしい。K氏もしばしば利用するという。その予約関係の用事が済むまで、こちらは鉄筋コンクリートの古びた校舎をぼんやりと眺めていた。

自然と子どもの頃を思い出す。小学校の同級生たちはいまだどこでどうしているのか。ほとんど知らない。小学生である彼らの顔を思い浮かべると、会わなくなってから重ねられているはずの年齢も、不思議とその顔つきに反映されているようで、町で見かける子どもの幼さは感じられない。当時頼もしかった友だちはいままも小学生にして頼もしく、当時魅力的だった女の子はいまも小学生にして魅力的だ。卒業式の日クラスの人気者が言っていた「大人になると泣けなくなるから、こういう時に泣いといたほうがいいらしいぜ」といういかにも子どもじみた生意気な言葉さえ、30歳の僕にある真実味をもって思い起こされる。彼らに対しては客観的でいられない。

ふとしたことで小学校を訪れると、たとえそこが自分の母校でもなく、未知の場所だったとしても、自分の経験に照らし合わせた懐かしさを感じてしまう。天井高や部屋の骨格、机や椅子などさまざまなものスケールの小ささに、個人的な時間の隔たりを強く印象づけられつつ、にもかかわらずそ



の空間は瞬時に20年以上の過去に引き戻す。

見知らぬはずの小学校があたかも記憶の再生装置として機能するのは、その建築の形式性の作用にほかならない。戦後、全国各地に広がった白く四角い鉄筋コンクリート造の形式。日本中どこにでもあるあの無個性な。モダニズムの抽象性、均質性が、時間と空間を超えて、それを経験した人々の記憶を呼び起こす。

3.

その日偶然訪れた旧四谷第三小学校の校舎は、昭和55(1980)年に改築されたものだった。それ以前、同じ場所に建っていた古い校舎も、同じくRC造のモダニズムの建築である。竣工は昭和4(1929)年。当時の東京市に、現在まで続く形式の小学校建築が次々と建設された時期だった[註1]。

小学校という近代に生まれたビルディング・タイプの始まりは、日本において明治5(1872)年の学制発布に遡る。校舎には当初、江戸時代の寺子屋や藩校、寺院などが用いられることが多く、新築されたものでも和風の寺子屋形式か擬洋風建築が主だったが、明治19(1886)年「小学校令」、明治23(1890)年「改正小学校令」の制定をきっかけに、校舎の標準化、定式化が本格的に進む。そしてその流

れを決定的にしたのは、明治 28 (1895) 年の「学校建築図説明及設計大要」の公布だった。そこでは校舎の形式、配置、間取り、教室形状について具体的に記され、設計の模範例や仮想設計図が示されていた。衛生面を最重要視し、それまでの典型だった中廊下式に代わって片廊下式が推奨され、また、各教室を南に向けるため平面形状の対称性も崩して、校舎は敷地の北あるいは西隅に配置すべきとされた。想定されていたのは木造の校舎だったが、ここにおいて、戦後の RC 造校舎にまで繋がる平面形式の大枠が提示されている。

ではその RC 造とはいえば、大正 9 (1920) 年頃に神戸市や大阪市、横浜市で小学校の校舎に用いられ始め、東京市でも大正 11 (1922) 年に最初の校舎が竣工した。そして翌大正 12 (1923) 年、関東大震災によって大きな被害を受けた東京市内の小学校は、その復興をきっかけとして、耐震性に優れ、都会の狭い敷地でも高層化が可能な RC 造を次々と採用していく。震災では 117 の市立小学校が被災したが、そのすべてを含む 171 校が、昭和 13 (1938) 年、日中戦争による資材統制を受けるまでに建てられた。この数字は当時の東京市立小学校のおよそ 84% に当たる [註 2]。

設計の標準化は、東京市によるこの一連の RC 造校舎建設においても進んでいた。震災以前、東京市立の小学校の建設は各区で民間に委託するのが一般的だったが、震災によって大量の校舎の建設が急務となったため、設計は東京市の営繕組織が一括して担うようになり、また統一的な設計規格が作成された。この設計規格は、機能主義的に平面各部の寸法、階高、窓面積などの水準を定めたもので、プランニングや構造計画の基準になるユニットを設定して設計を進める方法が指定されていた。モダニズムの学校建築として有名なパウハウスのデッサウ校舎は 1926 年の竣工だが、例えば「校舎並にその内外の設備に就いて、何よりもその用途の点に重点を置き、苟しくも、外形から出発する事を避ける」[註 3] と書かれるこの設計規格にも、当時国際的に最先端だったモダニズムの思想が色濃くうかがえる [註 4]。こうした規格に従って、東京市内に数多くの小学校建築が建てられたわけである。

4.

この震災復興と小学校建築の標準化の構図は、その後の戦後復興で、日本全国に規模を拡大して繰り返される。昭和 24 (1949) 年、文部省の委託を受けた建築学会は、翌年に「鋼筋コンクリート造校舎の建築工事」、いわゆる RC 造校舎標準設計を発表。これが 1920 年代に始まる RC 造校舎の普及と標準化を決定づけた。

現代の多くの日本人の小学校体験は、こうした基盤の上に成り立っている。各地に建設された小学校では、いつしか初期のモダニズムの思想は忘れられ、形式は形骸化していった

かもしれない。「悪しき標準化」に対する後世の建築的、教育的な批判は正論だろう。とはいうものの、それを少年期の日常として経験してしまった以上、僕にはその建築が悪いものだったと裁定することはできない。むしろそこでの経験は時を経て美化され続け、寄り添えないこの日常を支えるものとして何にも代え難い。

古き良き少年時代の記憶は、全国に配置された小学校建築を訪れることによって自在に甦る。その画一的な建築様式が追想を可能にさせる。そしてこれはなにも僕一人に限ったことではないはずだ。同級生だった頼もしい友だちも、魅力的な女の子も、クラスの人気者も、それぞれ大人になってまたどこか別の小学校を訪れ、当時僕らが共有した時間を思い出しているかもしれない、そう僕は思い浮かべるし、彼らのほうでも、僕が当時を思い出していることを思い浮かべているかもしれない。日本という共同体で 20 世紀に次々と建てられ経験された小学校建築の様式は、それを経験した人たちにおいてまた想像の共同体をかたちづくる。

5.

東京市四谷第三尋常小学校は明治 37 (1904) 年に開校、6 月に木造 2 階建ての新築校舎が完成する。昭和 4 (1929) 年には RC 造 3 階建ての校舎が完成。太平洋戦争中、児童は山梨県に集団疎開し、校舎は軍に使われた。敗戦直後の 3 ヶ月間はアメリカ軍の野戦病院として接收され、昭和 21 (1946) 年から 31 (1956) 年までの 10 年間を大蔵省の庁舎として貸与。その後、校舎の修理を経て小学校としての役割を再開。昭和 55 (1980) 年、現在も残る RC 造 4 階建ての校舎に改築。平成 19 (2007) 年、四谷地区での児童数の減少を理由に閉校。児童数は、設立の明治 37 (1904) 年が 464 名、ピークである昭和 33 (1958) 年が 697 名、閉校直前の平成 18 (2006) 年が 201 名だった。

この小学校がたどった数奇な道のりは、おそらく東京の中心部というその立地のよさに起因するところが大きいだろう。そしてまた、ここに限らず小学校とは、地理的にも機能的にもその地区の中心的な施設として計画され、存在する。だからこそ、明治以来の役割から外されたこの場所はいま、機能性と経済性が緊密に張り巡らされた都市の中で、よりいっそうの違和感を漂わせている。

都会の小学校らしくきれいに整備された小さな校庭は、いま無骨なフェンスが張り巡らされ、数多くのバイクと自転車が整然と並ぶ。新宿区内の放置車両が運び込まれているらしい。学校でもなく、公園でもなく、駐輪場でもない。その空白の場所に、所有者を持たず機能を引き剥がされた 2 輪の物体が集められる。そしてある日、同じようにしてひとりの失業者が引き寄せられる……。こう書くといかにも図式的な

センチメンタリズムだけど、実際の話、職を失った僕はいったいどう名乗ることができるのか、日々の社会生活で考えさせられる場面は多々ある。

長期的な見通しとして、辺り一帯で再開発の計画があるようだ。いずれこの場所も新しいシステムに帰属する。■



[註]

- 本文中の記述において、日本の小学校建築の歴史については長沢悟「学校の概要と建物の変遷」(『新建築学大系 29 学校の設計』彰国社、1983)、東京市立小学校については藤岡洋保「東京市立小学校鉄筋コンクリート造校舎の外部意匠に関する研究」(博士論文、東京工業大学、1980)に多くを負っている。また、四谷第三小学校については『新宿区教育百年史』(東京都新宿区教育委員会、1976)のほか、『新宿区史 資料編』(新宿区総務部総務課、1998)、『平成 18 年度 新宿区学校教育要覧』(新宿区教育委員会、2006)などを参照した。
- 昭和 7 (1932) 年に市域が拡張されているが、その旧市域において、新市域では主に木造の校舎が建設された。
- 古茂田甲午郎「東京市の小学校建築」建築学会パンフレット第 1 輯第 6 号、1927、p.15
- 実際の設計規格に基づいて建てられた小学校は、同時代的にも日本における近代建築の先駆的な例として高く評価された。ちなみに、註 1 に挙げた藤岡論文では、その評価の要因となった「白を基調とする無装飾の平滑な壁面と矩形窓で構成された外部意匠」の設計において、客観的な合理性よりも、あくまで外見上の明瞭性(近代性)が志向されていたことを指摘している。

[図版]

pp.88-89 現在の四谷第三小学校跡地。校舎は昭和 55 年に改築されたもの。四谷第三幼稚園(閉園)が併設されていた。
p. 91 昭和 4 年竣工の四谷第三尋常小学校校舎
出典＝『東京市教育施設復興図集』東京市役所、1932

長島明夫(ながしま・あきお)

1979 年、神奈川県生まれ。明治大学卒業、東京工業大学大学院修士課程修了後、株式会社エクスナレッジ勤務を経て、現在無職。エクスナレッジでの企画編集物に『昭和住宅メモリー』『住宅 70 年代・狂い咲き』『ザ・藤森照信』『東京建築ガイドマップ 明治大正昭和』など。個人誌『建築と日常』を創刊準備中。

